

Q:先ほど、印によって悪い気のようなものをブロックしていくというようなことを仰って、それとその、坐禅中にいろいろな感情や思いやすべてのことを、宇宙のような心ですべて受け入れて流していくということに、何か矛盾のようなものを感じるのですが、

A:ああ、それは確かにそうですね。それは仰っている通り、理屈上はそうなんですけどね、ブロックという言い方がまずかったのかもしれないんですけど、何て言ったらいいですかね……ガードって言うのと違うのかもしれないんですけど、入ってきて流れているものが、自分の中に、こう言えばいいでしょう。何か、誰もが何らかの煩惱を完全に滅尽していない限り、イメージ的に言えば傷があるんですよ。その傷がある場所に、似た種類のエネルギー波が入ってくるとそこに引っ掛かって、それがさっき申したように増大していくようなことが起きます。ですから、外から入ってくる魔というのは、内に元々ある魔と調和する、波長が合う場所に入ってきて、そこに食らいついて、そこで増大して行って、そこを肉体的に言えば病気にしていくか、精神的に言えばその刺激を繰り返すことで似たような精神パターンをどんどん増大させるということを行っています。

その場所が特定できるようになってきたら、そこに印を結んで手を置いていけばですね、その傷口に外から入ってきたものが、引っ掛かりにくくなるんですよ。つまり、そこが流れる状態に、してあげるといった感じです。というのは、手がそもそも、流れが一番強烈に実現できる場所だからで、手で受信しているエネルギーが体に入り込んで行って、そこに詰まりが生じにくくなるようなことが起きているということです。その結果として、その場所をガードする、ということになっているというだけで、何か入ってくるものを止めようとしているというわけではないということです。とりわけ入ってきて最初に、禍々しいエネルギーが、そもそも入ってくるのは自分の中のものがそれを呼び寄せているからであって、外のものが純粹に入ってきているわけではないんですけど、それが最初に入ってきて、大体その近くのどこかに食らいつこうとするんですよ。その人の弱点が、著しく弱いのがたとえば、腎臓とかだったとしたら、腎臓に行ったりしますけど、要は傷が多いというのは、煩惱のエネルギーがすごく溜まっている場所に優先的に食らいついて行って、そこを破壊しようとしたりするんで、ないし、そこでのそういう、禍々しいエネルギーを増大させよ

うとして活動し続けていてどんどん仲間を呼ぶような感じのことが起きていて、そこに適切に……、と言っても、手の置き方にしても「ブロックしてやるぞ」みたいな気持ちで置いていたら、まさに仰ったような、流れを阻害するような精神作用を働かせて、とげとげしいエネルギーをまた新たに生み出して、それを送るのでまさに火に油を注ぐようなことになって何もいいことはありませんけど、そういうことですね。流れが促進されるような感じになっているので、仮にそこに傷があっても、そこに食らいつきにくくなる、という感じです。送信して流れが良くなるという点があるように見受けられることと、もう一点感じるのは、受信もかなり敏感に手は行っていて、そこに入って来るものの中の不要なものを一回手に受信して、それで体の中をもう一回グワーツて巡らせて出すというプロセスも手がある程度関わって行ってくれるのです。ですから、そのたびに、しばしば、いろんな印の組み方や手の置き方というのが有的なものです。場合によっては、片方の手は受信だけに徹して、片方の手は送信だけに徹するというような、こういうのもあると思うんですけど、仏像とかがやっているあれっていうのは、変なポーズだなと思うかもしれませんが、仏像学者とかは、何とか印で何とかの意味があるとか仰っているでしょうけど、昔の瞑想者が他者を癒やすときに、エネルギー波を放出するために、ああいう印をとったりしているとか、そういうことだったに違いないです。というわけで意味があります。

……そうですね、今の質問に付言しておきますと、手を置いて、その場所が自分の弱点だから「絶対守ってやるぞ」みたいな感じで力んでいると逆効果になるから、やめてください。要は、お相撲は取らないでください、と言っているまさにその通りで、そのような具合に手を使うくらいなら、使わないで開いてほわ～っしてしているほうがよっぽどガードになります、ある意味。戦うっていうのは最大の、戦争するということは傷しか生まない、新しい傷を増やすだけ、ということは、皆さんが分かっておいていただけるとよろしいかと思えます。そういう意味で、誤解を生みやすい表現をしたので、その質問していただいたのはとても良かったと思えます。今日の話聞いて、ガードしなきゃいけない、と思って覚えて帰られるかたがいたらそれは多分、マイナスになりますから。